

表現よみとは何か

抄録版

朗読で楽しむ文学の世界

渡辺 知明

もくじ

まえがき

第一部 黙読・朗読・表現よみ

第1章 黙読と音読

- 1 よみ方のいろいろ
- 2 黙読とはどんなよみか
- 3 黙読と音読のちがい
- 4 表現よみとは何か
- 5 よみの理想

第2章 朗読と表現よみ

- 1 朗読とはなにか
- 2 伝えること・理解すること

- 3 オーラル・インタープリテーションと表現よみ
- 4 アランの朗読論

第3章 文学文と表現よみ

- 1 どんな文章をよむか
- 2 文学のコトバと理論のコトバ
- 3 コトバの裏づけと表現
- 4 散文としての文章
- 5 小説の文章をどうよむか

第4章 表現よみのすすめ

- 1 表現よみの楽しさ
- 2 一日五分よめば力がつく
- 3 準備するもの
- 4 練習の方法とコツ
- 5 発表会と交流の楽しみ

第二部 表現よみの実践

第1章 記号づけの方法

- 1 なぜ記号づけをするのか
- 2 記号づけのいろいろ
- 3 記号のつけ方
- 4 『和解』の記号づけ実例

第2章 人物のコトバのよみ方

- 1 人物のコトバをどうよむか
- 2 人物のコトバの四つの種類
- 3 作者の意識と作品の組立て
- 4 作品の組立てをどうよむか

第3章 文学作品のよみ方

- 1 表現よみと文章の構造

- 2 作品分析の実例『夜あけ朝あけ』
- 3 「朝の花」分析と解説
- 4 作品分析のすすめ

第二部 表現よみと小説の理論

第1章 表現よみ理論の歴史

- 1 表現よみ理論の出発
- 2 「聞き手ゼロ」と「主観」
- 3 「地の文」のもつ価値
- 4 「非反省的意識」と表現よみ
- 5 小説と文章の理論

第2章 小説の文章と文体

- 1 文学理論はなぜ必要か
- 2 「会話と地の文」と「説明と描写」
- 3 作者のコトバと他者のコトバ

4 小説の対話構造

第3章 視点・作者・主人公

- 1 現実の世界と作品の世界
- 2 視点を図解する
- 3 小説の文章構成の図
- 4 二種類の主人公
- 5 主人公のコトバ

あとがき

参考文献

索引

まえがき

1 音読としての「表現よみ」

「表現よみ」というコトバをはじめて聞く方は多いことでしょう。国語教育の世界では朗読とならぶ音読の方法として知られるようになりましたが、まだまだ一般の人たちには広まっていないようです。

わたしは日本コトバの会で二十年近く表現よみの研究をしてきましたが、「表現よみをしていきます」というと、いまだに「それはどんなよみ方ですか」と聞かれます。そして、説明をすると「朗読のことですね」などといわれてしまいます。

しかし、表現よみの歴史はずいぶん長いものです。昭和31年(1956)に日本コトバの会がはじめてその名称を名づけてから、独自の音読の方法として研究されてきました。日本コトバの会では、これまで三〇年以上、毎月、表現よみの実践的な研究会をもち、毎年二回ずつ研究発表会を開いてきました。

かんとんにいえば、表現よみとは、声を出して文章をよむ音読の一種です。子どものころ、わたしたちは声を出して本をよみはじめますが、いろいろな理由でおとなになると音読することやめてしまいます。しかし、音読は黙読にはないすぐれた点をそなえたよみ方なのです。

この本は、音読・朗読の意義を見なおすとともに、より高度なよみにすすむための理論と方法を示したものです。音読・朗読に興味をもつ方々ばかりでなく、コトバを声に表現することに関心を持つ方、音声化による文学作品のよみの問題を考える方々の要求にもこたえられるでしょう。

2 この本をよんでほしい方々

わたしはこの本をとくに次のような方々によんでいただきたいと考えています。

- ・ 子どもたちに本のよみ聞かせをしている方
- ・ 朗読奉仕のボランティア活動をしている方
- ・ 人まえて話をしたり、アナウンスをしたり、声を出す機会の多い方
- ・ 日ごろ人と話すことが多いのに相手の気持を理解するのが苦手な方
- ・ 小中学校の国語の先生で生徒たちに作品の音読を聞かせている方
- ・ 声優やアナウンサーをめざして朗読の練習をしている方
- ・ 演劇の基礎として文学作品の朗読の練習をしている方
- ・ 文学作品を文章表現との関連でどうよんだらよいか研究している方
- ・ 声で表現されるコトバについて研究している方

樋口一葉の作品の朗読で知られる幸田弘子さんは、NHKラジオのインタビューで朗読の上達の段階について、こんな意味の話をしていました。

「朗読の基礎的なことは、しばらくつづければたいいの人が上手になれます。むずかしいのは、その次の段階にどうすすむかということです」

この本のねらいはまさにそこにあります。朗読の基礎はできたけれど、その次の段階にすすむにはどのような勉強をしたらいいか。この問題について書かれた本は、わたしの知る限りまだ一冊もありません。朗読について書かれた本の多くは発声や発音やアクセント・イントネーションなどのごく基本的な点を述べるにとどまっています。じつは、音読とはたんに文章の文字を音に変えるような作業ではありません。テキストの文章をよみ手の声によって「生きたコトバ」に再創造することなのです。

3 「よむ」ことによる表現

多くの人たちは文学作品をよむとき、あたりまえのように黙読をしていることでしょう。しかし、文字として書かれている作品も、もとは声に表わされた音(オン)と考えられます。作者は書くべき内容のイメージをアタマに浮かべると、それを音(オン)であるコトバでとらえながら文字に写し変えたのです。

作者は一つ一つの単語にも、一つ一つの文にも、たんなる文字には表現できない多くのニュアンスをこめています。自分自身のアタマに浮かんだコトバの音(オン)を聞きながら、一語一句の文字づかいや一文一文の仮名づかいも慎重に選んで表現しています。漢字と仮名の使い分けなど細かい表記にこだわるのもその一例です。ですから、文学作品をよむことは、ただ目にした文章から情報を受け取るだけではなく、よみ手自身が作品の世界の創造に参加するものです。

一般に声を出して読むことは朗読といわれますが、表現よみと朗読とはよみについての基本的な考えがちがいます。朗読では聴衆にテキストの内容を聞かせて伝えるのが重点ですが、表現よみは聞き手よりもよみ手自身の理解に重点をおきます。

あなたは本を読んでいるときに、こんな経験をしたことはないでしょうか。理屈っぽくて理解するのがむずかしい部分になると、知らず知らずのうちに小さな声を出してしまう。それならばと思いきって、はじめから声を出して、ゆっくり少しずつ読んでみると意外に意味がとれます。ふしぎなことに、むずかしくて分かりにくい文章もすらすらと頭に入ってくるものです。こんなふうに、声を出すことによって文章の内容を理解すると同時に自分のコトバで表現するところに表現よみの本質があります。

作品に書かれた文章をよみ手が声に表現することは、もともと基本的な創造行為です。表現よみはコトバを使った自己表現であり、しかも声さえ出ればだれにでもかたんにできます。

お金のかかる道具も、むずかしい道具も使う必要がありません。一度はじめると、たいいていの人が病みつきになってしまいうほど楽しいものです。「表現よみのおかげで文学を味わう喜びを知った」という人も数多くいます。また、楽しいばかりでなく、だれにも手軽にできるコトバ学習の有効な手段でもあります。わたしはこの本で一人でも多くの人たちに、表現よみをすることの楽しさと、文学作品をより深く味わえるすぐれた効果を知っていただきたいのです。

4 表現よみの楽しみ

表現よみはかんたんにはじめられます。今日からでも声を出して作品をよみはじめればよいのです。はじめは、俳優やアナウンサーのような専門的な発声や発音は必要ありません。とにかく声に表現して楽しめばよいのです。その意味で表現よみは、朗読よりも気軽に入門できる音読の方法です。

表現よみは舞台に立ってナマの声で大勢の人に聞かせることが目的ではありませんから、声楽家のように大きな声やアナウンサーのようなナマリのない発音や正確なアクセントは必要ではありません。声が小さくても、アクセントが「標準」ではなくても、作品の世界を理解して声で表現することが目的です。たとえ地方ナマリのある方言でよんでも、作品の世界を心でつかんでいるなら、標準アクセントの平坦なよみよりもはるかに価値があります。

しかし、表現よみに上達すると、人が聞いても「うまい」という読みになります。わたした

ちの仲間のよみには、カセットテープで売られている俳優やアナウンサーの朗読とはちがった味わいがあります。表現よみの「うまさ」は、アクセントが正しいとか、発音がきれいだという表面的なものではありません。文学作品に描かれた内容が、よみ手の声を通じて聞き手の心にくつきりと浮かび上がることです。

表現よみには文学作品の文章の構造について独自の理論があります。文学作品の文章を理解する理論があれば、より高度なよみが可能になります。ですから、もっと上手によみたいと考える人たちの要求にもこたえられるのです。

表現よみには黙読とはちがった楽しみがあります。しかし、表現よみの効用はそこにとどまりません。日ごろから文章を声にしてよむことによつて、日常生活におけるコトバの表現力はもちろんのこと、言語による思考能力まで高めてくれます。

5 この本の構成とよみ方

以下、各部分ごとに本書の構成を紹介しておきます。

○第一部 黙読・朗読・表現よみ……まず、音読と黙読の比較で音読の意味を考えることにはじまり、音読の代表である朗読と表現よみとの比較から表現よみの特徴を述べました。すでに、音読・朗読を経験している方も、あらためて音読の意味について確認できるように。

○第二部 表現よみの実践……「もう理屈はいいから、どうやればいいのか教えてほしい」と

いう方のために、今からすぐ表現よみが実行できるように具体的な方法を書きました。

○第三部 表現よみと小説の理論……表現よみ理論の歴史をたどったあとで、小説の文章の構造をとらえる理論について説明しました。作者は作品の内容をどのような方法で構成し、それが文章にどう表現されるのか、作者・文体・視点・語り手・主人公などについて、よりくわしく知ることができます。

1995年6月30日

あとがき

「本をよむ」といえば、たいてい「どんな本をよむのか」という問いが返ってくるものです。それも多くの情報にあふれる現代社会において当然かもしれません。しかし、本にもいろいろなよみ方がありますから、「どのようによむのか」という大切な問題があります。

コトバの活動には「話し・書き」はさまざまに研究されてきましたが、受け手の面である「聞き・読み」は軽視されてきました。また、朗読ももっぱらコトバの送り手の立場から考えられてきました。表現よみはコトバの受け手の面を重視した「よみ」の理論です。

わたしは二十年以上、表現よみを実行しています。文学作品の一文一文を声に出してよみながら、どうしたら深く味わうことができるのかにこだわってきました。毎日、多くの情報に追われる現代に、そんな能率のわるい読書をするのはのんきなことと思われるかもしれませんが、しかし、わたしは表現よみの理論を本にまとめるうちに、もしかしたら音読が「よみ」の考えを根本から転換させるかもしれないと思うようになりました。むしろ、今のような時代だからこそ、かえって素朴なよみ方に立ちもどってみることに価値があると思うのです。

現代のような情報の多い社会であっても、個人の知識は情報の量に解消されるものではありません。

ません。価値ある情報を選択して収集する一方で、知恵の支えとなる確かな知識を身につけるためにも文章をじっくりよんで理解することが必要です。表現よみは文学作品を味わうためだけでなく、理論的な文章の理解の方法としても有効です。たとえ理論として書かれた文章であっても、すぐれた文章には著者の作品としての価値があります。そこには書き手の性格や文章の味わいというものが表現されます。

表現よみは、一つの文章から、いかに豊かな味わいを引き出すことができるかというよみ方です。ただし、すべての本を表現よみすべきだというわけではありません。表現よみすべきものは、繰り返し読みの熟読・味読に耐えうるような作品です。これはよいと思われる文章を選んで、時間と余裕に応じて表現よみしてください。ほかの多くの文章は黙読すればよいのです。いったん表現よみの訓練を通過すると、黙読は以前とは質のちがったものになります。文字づらを追って情報を拾うのではなく、文章の表現を生き生きと味わえるようになります。

表現よみは音読はもちろん、文章の「よみ」の考えを転換させるでしょう。しかし、表現よみの理論も実践もまだまだ発展途上にあります。わたしは、この本の出版を機会に、音読にかかわる広い分野の方がたの話し合いや研究の場ができることを期待しております。

最後になりましたが、わたしがこの本を仕上げられたのは、今も表現よみの共同研究をつづける日本コトバの会・コトバ総合研究会の仲間たちのはげましがあったからです。この場を借りて感謝します。そして、なによりも、こころよく出版をお引き受けくださった明治図書・江

部満氏に心から感謝いたします。

1995年6月30日

渡辺知明『表現よみとは何か―朗読で楽しむ文学の世界』1995明治図書出版所収